



今回、アジア・アフリカ農村地域におけるコミュニティ開発という言葉に惹かれて私はアジア学院の活動説明会に参加しました。もともと、国際協力、とくに人と人のつながりに焦点をあてた活動に関心があったからです。しかし、この説明会に参加して私が最も印象深かったのは「平和」と「食べもの」の話でした。

アジア学院からいらした山下さんは説明会冒頭で私たち参加者に「平和」に対するイメージを尋ねました。私の頭に浮かんだのは、途上国にいる子どもたちが笑っている姿など漠然としたものでしたが、山下さんは自分にとっての「平和」とは「みんなが等しく(=平)食べることができる(=和)」状態とのこと。なぜなら、「食べもの」があつてはじめて人間のさまざまな活動が可能だという理由からでした。これを聞いたとき、私ははっとさせられました。山下さんの考えを聞くまで、私の思い描いていた国際協力はすべて「食べもの」があるという無意識の前提の上にたっていたことに気づかされたからです。

私自身、日常生活の中で空腹時には集中力が途切れたり、苛立ちを覚えたりすることが少なくありません。このとき、人はもちろんものも含めた他者を気づかう余裕は薄れ、自己中心的になりがちです。このような状態では、国際協力の活動に従事することはおろか、他者を物理的にも精神的にも攻撃してしまう可能性すらあります。

山下さんの話を聞くことで、私は「当たり前」だと思い込んでしまっていた「食べもの」の重要性を再認識することができました。同時に、人間活動の根本にある「食べもの」についてアジア学院に集う人々のコミュニティの中で共に食べ、学び、考えていきたいと強く思いました。

(国際社会学部東南アジア地域(ベトナム)2年 林 塑恵)



※お話を伺った後、アジア学院の生産物をみんないただきました。